

# 氾濫するカタカナ語

— ‘歯止め’ から ‘共生’ へ —

熊 抱 ゆかり\*

## 1. はじめに

近年、新聞・雑誌は勿論のこと、学会の場や論文等でもカタカナ語の氾濫に対する警鐘が鳴らされている。昨年(2007)の6月12日に弘前文化センターで開催された日本比較文化学会第26回全国大会でのシンポジウム「多文化交流の問題点」一に於いて「カタカナ語の氾濫と日本人のアイデンティティ」という議題で山形大学名誉教授及び現国際日本文化研究会会長である、飯島武久先生の発表が行なわれ、カタカナ語容認派と否定派との間で議論が飛び交った。私自身もその前年度に開催された同学会第25回全国大会(於：京都橘女子大学)で、カタカナ語否定派として発表を行い貴重な意見や感想を頂き、今年3月に行なわれた同学会第17回九州支部大会(於：久留米大学)でも別の視点から発表を行い、ここでも諸先生方から質問や意見を頂き、カタカナ語の氾濫に対する関心の高さが伺えた。

このカタカナ語の氾濫に対する警鐘は実は今に始まったことではない。日本が鎖国を解いた直後に、凄まじい勢いで流入してきた英語を中心とする欧米言語に対し、当初は漢語による翻訳という手段で対処してきたが、ついに翻訳が追いつかなくなり、大正末期から昭和初期にかけてカタカナ語が溢れ出す結果

---

\* 福岡大学人文学部

となった。大正 13 年にはこの溢れ出すカタカナ語に対する脅威や、昭和 5 年に書かれた「片仮名でひく外国語辞典」(平凡社)の「緒言」の一節にも「外来語=カタカナ語」の氾濫を指摘する声が出ている\*<sup>1</sup>。

現在、カタカナ語の氾濫に対する歯止めの為に、私的機関の地道な運動\*<sup>2</sup>や国立国語研究所のカタカナ語言い換え案も回を増してきたが、現実には歯止めが掛かるどころか、ますますカタカナ語の多用・誤用・氾濫が続いているのが現状である。カタカナ語はその殆どが英語であり、最近ではカタカナ語のみに留まらず、アルファベット\*<sup>3</sup>表記やアルファベット略語も目立ってきた。

前述したように氾濫の現状に対しては賛否両論であり、‘氾濫’ではなく日本語の‘語彙が豊富’になってよいのではないかとカタカナ語を容認する人も多い。言語の享受は文化の享受であり、逆に文化を享受することは言語の享受に繋がる。しかしカタカナ語が英語教育と外国人への日本語教育にも影響を与えている現状に於いては、やはり‘氾濫’であると考える。歯止めが掛からず益々激化するこの‘氾濫’の実態に直面している現在、もはや‘歯止め’ではなく‘共生’への道を模索する方が賢明ではないだろうか。本稿では日本に於ける外来語の歴史を踏まえ、カタカナ語氾濫の現状とその影響の良し悪し、また、カタカナ語に関する意識調査の結果を紹介し、今後の対処法を考察するものである。

## 2. 外来語

日本語の語彙は約 230,000 語である。ドイツ語(約 185,000 語)やフランス語(約 100,000 語)の語彙数に比べてもかなり多い。外来語が多いのがその理由である。中国語から取り入れた漢語も外来語に含めると、本来の日本語である和語は半分にも満たないのである。英語の語彙数も約 500,000 語と圧倒的に多い。日本語と同様に外来語が多いのがその理由で、使用頻度が高い英単語 2 万語のうち、本来の英語は 19%\*<sup>4</sup>である。

「外来語」とはそもそも「外国語を源泉とする自己の言語の単語」、「自国語化された外国語由来の単語」、「外国の言葉が日本語化したもの」である。外国語が日本に入ってきた時に様々な変化をし、導入された言葉である。明治時代以前は「蛮語」や「舶来語」と言われていたが、明治時代以降は「外来語」と呼ばれるようになり、昭和に入って「輸入語」、「借用語」と呼ばれ、現在はその語彙数の多さからか「カタカナ英語」と呼ばれることも多い。

日本語に於ける外来語の歴史は、平安・鎌倉時代に遡る。仏教文化と共に漢語と梵語（サンスクリット）が導入され、室町時代にはキリシタン文化と共にポルトガル語が入ってくる。江戸時代の鎖国時代に突入すると、外国との唯一の窓口は長崎の平戸で、オランダが200年以上に渡り貿易を独占することになった。これに伴いオランダ語からの外来語を多く取り入れることになった。明治時代以降は欧米文化の始まりの時代である。「日本の近代化＝西洋化」となり、英語やドイツ語、フランス語が入ってくる。特に医学、薬学、化学の分野ではドイツ語から、そしてファッション、料理、美術関係ではフランス語から多くの単語を取り入れた。大正時代は明治時代以上に外来語が流入し急増した。昭和初期にかけては外来語を積極的に取り入れ、アメリカ人の宣教師による影響や、福沢諭吉や津田梅子の渡米、そして帰国後の塾の開設なども影響し、英語（米語）が圧倒的な位置を占めた。

外来語辞典の中にはアルファベット略語を含め28,000語もの外来語を掲載しているものもあり（「用例で分かるカタカナ新語辞典」学習研究社、2003年）その殆どが英語である。新聞や雑誌から用例を収録しているが、この用例について「みな生きている表現であり、より読者の心に伝わることを目指して書かれたものである」と「まえがき」に記載されている。この‘読者に伝わる’というのは‘読者が理解出来る’というのではなく、むしろカタカナ語を使用することによって読者を‘錯覚’に陥らせ、購買欲を刺激したり、暗黙のうちに容認させたりすることではないだろうか。

外来語の襲来—その殆どが英語であるが—に警鐘を鳴らし、対抗策を打ち出す国もある。最も敏感な国はフランスである。同国は1994年に広告や求人案内、公文書など公共性の高い分野でフランス語を使用することを義務づける法律を制定<sup>\*5</sup>させた。また政府の委員会が20年近くかけて‘言い換え語’を検討してきた。現在の日本の国立国語研究所と同様なことを行なってきたという歴史がある。またその検討結果をまとめた「フランス語公式用語辞典」も刊行したが、多くは普及していないとのことである。世論調査の結果、英語の使用は「現代的」で「実用的」との回答が多かったとのことである（読売新聞日本語企画班、2003年、pp.252-253）。日本も含め英語の襲来に脅威を感じている国々で世論調査を行えば、同様の結果が出るだろう。

### 3. カタカナ語効果

カタカナ語の氾濫は流行に関する分野では凄まじいものがある。衣食住に關するものでは、雑誌や広告などにも多くのカタカナ語が使用されている。それでは、漢字と平仮名だけの文章と、カタカナ語を交えた文章では印象がどのように変わるのだろうか。下記の①は、ある自動車会社の新車宣伝を兼ねて、試乗会を開催するという広告からの一部抜粋で、②はそれを漢字と平仮名だけで書いてみた。

①△△△（車名；勿論カタカナ）の性能をフルに体験して頂くことをメインテーマとしています。また、サーキットのみならず、絶好のロケーションを活かした試乗コース、そして話題の温泉地のカップリングを実現…。適度なワインディング…。日本有数のツーリングコース…。

②△△△の性能を最大に体験して頂くことを主要な目的としています。また、競走路のみならず、絶好の所在地を活かした試乗走路、そして話題

の温泉地の連結を実現。適度な屈曲…。日本有数の長距離走行路…。

上記の例のようにカタカナ語（英語）を使用すると、読み言葉にしてもお洒落な感じがするし、漢字と平仮名だけよりも読み易いような気がする。日本語だけでは単調になりがちな文章を‘カタカナ語効果’により文章を際立たせ、垢抜けした印象を与える効果がある。この垢抜けした、斬新で高級な印象を与える‘カタカナ語効果’を巧みに利用し、消費者の購買力を刺激するのである。化粧品名やマンション名などにはカタカナ語が多く、最近ではアルファベット表記も多い。特に車名に於いては日本語表記名を探すことすら困難である。ビールの商標名は英語表記自体が目立つが（例；Super Dry / First Lady / REDS / MALT'S / HOP'S など）、最近では商品の斬新さを表す為に、あえて漢字を使用するものもあり（例；一番搾り、淡麗、純生、黒生、富士山、秋味など）、平仮名表記（例；やわらか、のどごし）も現れている。

求人広告誌にも、職種や肩書きにカタカナ語が氾濫している。カタカナ語表記が増えたのは1980年代のバブル期であるという\*<sup>6</sup>。人手不足の為に中途採用も増え、応募者を集める為に職種のイメージをよくしようと、大量のカタカナ語職種が生まれた。「カラーコーディネーター」、「フードコーディネーター」、「インテリアコーディネーター」、「人材コーディネーター」、「アロマセラピスト」、「リフレクソロジスト」、「キャリアカウンセラー」、「ルームアドバイザー」、「寝具アドバイザー」など、語尾が‘コーディネーター’や‘～スト’、‘カウンセラー’や‘アドバイザー’で終わる職種も多い。カタカナ語化することでその職種のイメージを一新し、若者や女性達の関心を引く作用を期待しているのは分かるが、中には職種が不明瞭なカタカナ語も多い。以下の職種は店頭や駅などに置かれている無料の求人情報誌に実際に掲載されていた職種名であるが、どういう職種か想像して頂きたい。

- ①ムービングアドバイザー
- ②カスタマーフレンド
- ③ピッキングスタッフ
- ④イベントクロージングスタッフ
- ⑤サンプリングスタッフ
- ⑥オフィスメイト
- ⑦ナイトクルー
- ⑧セットアップスタッフ

上記の職種の内容は①引越し作業員、②営業、③商品の仕分け・検品作業、④商品案内・申し込み受付業務、⑤試供品の配布、⑥営業職の補佐、⑦24時間営業スーパーの深夜勤務、⑧車の登録手続き・納車・引取り・洗車・クリーニング職である。内容を見れば‘なるほど’と思うが、カタカナ語のみでその職種の内容を理解するのはかなり難しいことが分かる。

中には「ポスティングスタッフ・キャンペーンスタッフ・カフェスタッフ・バックヤードスタッフ募集」のように職種を全部カタカナ語表記で募集している会社もあった。またカタカナ語職種名を使用する多数の会社が、その会社名自体がカタカナ英語か英語そのもの、或いは平仮名や漢字との併用であった。「電話対応業務」という職種に「テレコミュニケーター」、「テレホンアポインター」、「テレマーケティング」、「コールスタッフ」や「コールセンタースタッフ」など違ったカタカナ語も使用されていた。「ホールスタッフ」や「キッチンスタッフ」、「デリバリースタッフ」は初歩級であるが、最近では「カフェクルー（喫茶店での飲み物提供業務）」も登場している。公的機関である「公共職業安定所」も、いつの間にか「ハローワーク」となっている現在、カタカナ語の企業名や職種に目くじらを立てる必要はないのかもしれないのだが。

官公庁発のカタカナ語の乱用も目に余るものがある。カタカナ語の氾濫が最

高潮に達したのはやはりバブル期である。省庁の現況報告でも冒頭の1ページだけで13ものカタカナ語が使用されたこともあるそうだ。同時期、現小泉純一郎首相が厚相（当時）在任期間中である89年（後に97年にも行なわれた）、省内で使用されているカタカナ語を総点検して、適切な日本語に言い換える「用語適正化委員会」を設置し、国民に分かりにくいカタカナ語排除を訴えたとのことである。当時はカタカナ語を巧みに使用した事業名で「新規事業」という錯覚を起こさせ、省庁予算を‘ゲット’することが出来た、と国会のベテラン秘書の談話もある。この傾向が未だに続いているのか。以前行なった官公庁のホームページに於ける調査でもカタカナ語の乱用は顕著であった。平成17年2月8日発行の読売新聞の朝刊に、国土交通省発案の「車ナンバーIC化」、「ロードプライシングにも応用」という見出しで、車のナンバープレートにICチップを埋め込み、その新たなプレートを「スマートプレート」と呼ぶ、という記事が掲載されていた。ごく最近では環境省発の「クールビズ」がある。以前の「省エネルギー」を改め、「涼しく効率的に格好良く働くことが出来る」というイメージを‘分かりやすく表現’した、夏の新しいビジネススタイルの愛称を一般公募し決定したものである。このように官公庁発の「カタカナ新語」の発生はとどまることがない。官公庁のカタカナ語の氾濫に対処すべく、約1万語を収録した「官公庁のカタカナ語辞典」（三省堂、1994年に初版、1998年に第2版）も発行されている。小泉首相の当時の努力は水の泡に終わり、首相になった現在は何の試みも行なわれなくなった、と結論付けたいくらいである。

このような流れを受けて、読売新聞新日本語企画班（2003、pp.204-209）は‘退治’しなければならないカタカナ語を次の四つに分類している：「ペンキ語＝ペンキを塗って新しいもののように仕立てた語（例；「ぶどう酒」「ワイン」、「切符」「チケット）」、「張りぼて語＝誇大広告（例；「新装開店」「リニューアルオープン）」、「詐欺語＝相手を誤解と理解不能な状態に追いつ込む為に意図的に使われる語（例；「セーフティーネット」、「アカウンタビリ

ティー」など)、「足引っ張り語=適当な和語や漢語を駆使してカタカナ語に入れ替えるもの(例;「柔らかな」「ソフトな」「天然」「ナチュラル」、「女性らしさ」「フェミニンさ)」。

消費者はカタカナ語やアルファベットを使用する側の意図をきちんと見分けることが賢明であるが、カタカナ語やアルファベットを使用することによる効果は実に絶大であるのだ。最近放映されている洋画に於いても、以前の邦題から英語やカタカナ語表記に変わってきている。「味気ない」と嘆く中高年も多いかもしれないが、原作の題名と同じ(或いはほぼ同じ)になったことで若者には受けているようだ。ビデオやDVDを探す時にはむしろ便利になったようである。

#### 4. カタカナ語が及ぼす影響

カタカナ語によって英語を身近に感じ、英語習得に有利な点もある。カタカナ英語や英語自体が日本の歌謡界に氾濫している。以前は歌の題名や歌詞の中に氾濫していたのだが、現在は歌手名にもこの氾濫の傾向がある。たとえ英語嫌いの学生でも、ヒット曲に混じっている英語には殆ど抵抗を感じず、むしろその意味を理解しようと努力する。また子供の頃から生活の中に浸透している単語もかなりある。「なぞなぞ」よりも「クイズ」、「さじ」よりも「スプーン」、また「ニュース」、「チョコレート」、「クッキー」、「ビスケット」、「キッチン」、「シャワー」、「ケーキ」、「プレイ」など例を挙げるときりが無い。最近では「ゲット」、「リセット」、「マイナスイオン」などの単語を理解している子供達も多い。野角(2003、pp.145-153)が、中学3年生で実際に使用されている英語の教科書の中から外来語として日本語に導入されている英語を抜き出した結果、85ページ中241語あったということだ。幼い頃から日常的に使用されていて馴染みのあるカタカナ語が殆どである。外国語を習得する際に全くの‘無’から始めるよりは、少しでもその言語に馴染みがあれば習得の手助けになるに



違いない。

勿論、ここには落とし穴である‘和製英語’の問題も存在する。和製英語は英語の単語を基にして作られている造語であるが、英語の単語をそのまま組み合わせたもの（例；アフターサービス、ガソリンスタンド、テーブルスピーチ、バックミラー、ベースアップ）や、短縮したもの（例；アニメ、テレビ、アパート、パソコン、エアコン、ワープロ）、また英語のようであるが実は他の言語からの借用語（例；アルバイト、シュークリーム、ノルマ、ピーマン）などがある。以前行なった和製英語の小テストでも、学生達の理解度の低さが明らかになっている。出題の20問中何問も、或いは全問を「英語」であると判断した学生もいて、正解率が0%の単語が20問中10問という結果に終わっている。この小テストは本大学だけでなく、国立大学や女子大の英語学科を含む幾つかの大学で行なったのだが、やはり和製英語に関しては同様の結果が出た。

和製英語の問題を強調すればきりがないかもしれない。しかし小学校6年間の全教科の教科書を検証の結果（野角、同、p.141）、中学で英語習得を開始する前に、日本の子供達は既に1680語ものカタカナ英語を知っている、とのことである。このうち全体の15%弱が和製英語で、残りの85%以上は英語として十分に利用可能である。だがここにも‘発音’という問題が存在する。カタカナ語をそのまま英語として発音してもネイティブには通じないことも多いからだ（例；アレルギー、オアシス、ビニールなど）。

また、和製英語以外のカタカナ語の特性も知っておく必要がある。カタカナ語の中には、元の言語のごく一部の意味で使用したり、意味を変えて使用したりするものがあるからだ。下記にそのほんの一例を挙げることにする。

\* ごく一部の意味で使用する単語の例

単語	カタカナ	英語の意味	カタカナ語の意味
boom	ブーム	とどろき・ブーンという音・ にわか景気（流行）	にわか景気（流行）
dandy	ダンディー	飛び切りの物（人）・（け なして）洒落男、きざ男	（誉め言葉として）洒落男、 素敵な男性
date	デート	日付・年月日・会う約束	会う約束
guts	ガッツ	内臓・根性・決断力	根性
hint	ヒント	手引き・兆候・手がかり	手がかり
propose	プロポーズ	提案・企て・結婚の申し込み	結婚の申し込み
sex	セックス	性別・性行為	性行為
yell	エール	悲鳴をあげる・叫ぶ・声援	声援

\* 意味を変えて使用する単語の例

単語	カタカナ	英語の意味	カタカナ語の意味
cider	サイダー	リンゴ酒	炭酸飲料水
feminist	フェミニスト	女性拡張論（運動）・男女 同権主義	女性にやさしい男性
host hostess	ホスト ホステス	主人・主催者 女主人	飲み屋で客をもてなす男性 ” 女性
master	マスター	家長・かしら	飲み屋の主人、経営者
naive	ナイーブ	無邪気な・初心者の（幼稚 な、世間知らず）	繊細な（誉め言葉で使用）
pitch	ピッチ	調子、高さ、投げること	「スピード」の意
silver	シルバー	銀（稀に動詞で「白髪にな る」の意）	お年寄り
veteran	ベテラン	除隊した軍人	経験豊富な人

またカタカナ語の曖昧な点は、発信者によってカタカナ語表記が違う点である。例えば「symposium」である。カタカナ語辞典には「シンポジウム」と

表記されているが、時に「シンポージアム」、「シンポジュール」、「シンポジュール」、「シンポ」などと表記される。このように一貫性に欠けたカタカナ語表記はカタカナ語を曖昧にし、混乱を招きかねない。小林（2002、pp.97-99）は、カタカナ語の氾濫により日本人どうしの議論がかみ合わなくなったり、好きな本が読めなくなったり、カタカナ語を理解しない人への‘差別や偏見’に繋がることを危惧している。

今年3月に新聞、テレビや雑誌などで企業買収の報道が盛んに行なわれ、「TOB」、「CEO」、「M&A」や「シナジー」という言葉があちこちに飛び交った。このような専門用語は一部の専門家のみが使用するべきものなのだろうが、日常的に使用される為に知らないニュース自体が理解出来ないことになる。日常的に当たり前のように乱用されているカタカナ語、或いはアルファベット（略）語が理解出来ないことによる不都合は計り知れないものがある。

## 5. カタカナ語に関する意識

以前行なったカタカナ語に関する学生の意識調査によれば、カタカナ語の使用に肯定的な意見として：聞こえがよくお洒落である（例；「ろうそく」より「キャンドル」、「食堂」・「喫茶店」より「カフェ」）、知的な感じがする、見た目にスッキリである、人の注意を引きやすい、カタカナ語の方が言いやすい（例；「温かいミルク」 「ホットミルク」）、カタカナ語の方が何か楽しそうな感じがする（例；「空想・幻想」よりも「ファンタジー」、「行事」よりも「イベント」）、日本語では重たい感じになるのでカタカナ語の方を使用する（例；「中心機関」 「センター」、「装身具」 「アクセサリー」、「～売り場」

「～コーナー」）、カタカナ語を使用することによりマイナスのイメージをプラスに変えることが出来る（例；「独身」 「シングル」）、などの意見が出た。逆に否定的な意見として：普段新聞やテレビを見ていて意味が分からないことがよくある、理解出来ないことがあるが何となく感覚的に理解していることが

ある、和製英語が多くて英語習得の際にマイナスになっているようだ、などの意見があった。

またカタカナ語を頻繁に使用するのは：他のカタカナ語と連結して使用する時（例；オレンジジュース、マロンケーキなど）、洋風である時（例；オムライス、カレーライス、ポテトサラダなど）、日本語と組み合わせることで頻繁に使用するカタカナがあり（例；自動ドア、電話ボックス、英語のテキスト）、カタカナ語（英語）の方が想像しやすく伝わりやすい、という意見も出た。

国立国語研究所も満 15 歳以上の男女 4,500 人を対象に（有効回答数約 69%）、平成 15 年の秋に外来語に関する意識調査（選択方式）を行なっている。それによると、外来語使用の良い点として：話を通じやすく便利（29.5%）、新しさを感じる事が出来る（28.2%）、これまでになかった物事や考え方を表す事が出来る（25.6%）、洒落た感じを表す事が出来る（22.1%）、同じ意味でこれまで使っていた言葉の暗いイメージをなくす事が出来る（20%）、露骨な表現を和らげる効果がある（17.7%）、知的な感じを表す事が出来る（13.9%）、の回答を得ている。結果に男女の差はあまり見られないが、年代の差は顕著であった。若い年齢層は肯定的に受け止めている一方、年齢が高くなるほどその率は低くなっている。職業別にみると、肯定的に受け止めている学生、管理職、商工サービス業、事務職に対して、農林水産業の 31.3%と無職の 23.1%が「良いと思う点はない」に回答している。

次に外来語使用の悪い点として：相手によって話を通じなくなる（46.7%）、誤解や意見の取り違えがおこる（37.2%）、日本語の伝統が破壊される（33.3%）、読み方が難しく覚えにくい（27.4%）、正しい英語を学ぶ妨げになる（17.2%）、いかにも気取っている感じを与える（13.4%）、人を煙に巻いたりごまかしたりする時に使われる（12.7%）、軽率な感じを与える（11.5%）、と回答している。認識に男女差はあまり見られないが、やはり年齢が高くなるほど使用に関して否定的な率が高くなっており、職業により各々の項目に対する否定的な率に差

がみられる。

知らない外来語や略語への対応として：調べない（47.5%）、調べる（27.8%）、時と場合による（23.4%）、という回答結果が出ており、男女共30代から50代の年齢層で「調べる」という率が3割を上回って多くなっているが、10代と60歳以上では「調べない」というものが半数を上回って多くなっている。また外来語が分かりにくい分野として：コンピューター関連（59.3%）、政治・経済（59.1%）、医療・福祉（49.3%）が多く、音楽（10.5%）、スポーツ（7.5%）、料理（7%）、と続いている。政治や経済、また福祉関係は生活に密着した内容でもあるのだが、ほぼ半数近くが「分かりにくい」と回答しているのには、かなりの問題があるように思える。益々進むIT化の流れで、少なくとも一家に一台はパソコンを所有するようになった現在、カタカナ英語やアルファベット略語ばかりの専門用語が理解出来ないと操作自体に支障をきたすことになるからだ。

また将来の外来語の使用として：分かりにくい外来語は言い換えしたり説明を添えて使うようになるべきだと思う（49.5%）、外来語についても学校で教えて誰もが分かり使うようにすべき（21.6%）、個人の自由にまかせるべき（15.5%）、外来語はなるべく和語や漢語に言い換えるべき（7.1%）、などの回答を得ている。将来どうなるべきかに関して：自然の成り行きに任せる方がよい（65.5%）、なるべく減らしていくべき（22%）、もっと増やしていくべき（6.6%）、という回答で、男女共高齢層ほど「減らしていくべき」との回答が多かった。職業別では、全職種が「言い換えや説明を添える」に肯定的であるが、「なるべく和語や漢語に言い換えるべき」に肯定的な率が農林水産業では2割弱と他の職種よりも高くなっている。

## 6. おわりに

日本に於ける外来語の歴史に触れ、カタカナ語氾濫の現状を踏まえて、カタ

カナ語効果やカタカナ語が及ぼす影響の良し悪し、そしてカタカナ語に関する幾つかの意識調査の結果を見てきた。

外来語の歴史で見たように、他文化との交流が始まるとその国の言葉が日本語に流入するのは避けられない。流入してきた外国語から造語も作られ、日本語の語彙の増加に繋がってきたことは事実である。数々の調査からカタカナ語使用に関する肯定的な意見もかなり見られる。ただ年齢や職業による認識の差もあり理解度も様々なので、使用する側と受け取る側の意識改革は必要である。カタカナ語やアルファベット略語の使用でお互いが理解不能になるのであれば、それこそが最悪の事態である。コミュニケーションの不成立は人間関係にも影響するからだ。

国立国語研究所の外来語委員会のカタカナ語言い換え案もはや3回目だが、氾濫に対する歯止めが掛かっていると言うよりは、多用・誤用・乱用が益々急速に進んでいるのが現状である。また民間発の試みも行なわれているが、殆ど進展しているとは言い難い。数々の警鐘も見過ごされ、‘カタカナ新語’も次々と生まれて、益々カタカナ語の氾濫の勢いは増している。今後は氾濫の歯止めの為の対策よりは、いかに日本語と‘共生’していくかが問題になる。

カタカナ語やアルファベット略語を使用する側の対策としては、常に読者・視聴者側に立ち、分かり易い表現を試みる義務がある。分かりにくい、あまり定着していないカタカナ語やアルファベット略語は、必ず言い換えると共にその意味を添え、日本語の意味を明確にしなければならない。また混乱を避けるためにもカタカナ語表記の一貫性が必要である。日本語や英語教育の場ではカタカナ語（外来語）やアルファベット略語の教育の場を、必修科目の一部として設けることを思案することが望まれる。今後益々加速するIT化の流れを踏まえ、コンピューター用語も学校教育の場で学ぶ機会を与えることが必要である。

[註]

- \* 1 読売新聞新日本語企画班、2003年、pp.242-243 参照
- \* 2 2001年12月23日に「通じないカタカナ英語」追放シンポジウム（於：福岡）が開催されたり、読売新聞社もカタカナ語に関する全国世論調査（全国の有権者3,000人を対象として2003年3月22、23日に行われた調査）を実施したりしている
- \* 3 以下、本論文でいう「アルファベット」とは、英語を中心とした、フランス語、ドイツ語、イタリア語等のアルファベットをいう
- \* 4 これに対してフランス語が36%、ラテン語が15%、ギリシャ語が13%を占めている
- \* 5 この法律の制定より20年程前に同様の法律が制定されたが、今回の法律で罰則をより強化した
- \* 6 読売新聞日本語企画班（2003年、pp.200-201）参照

[参考文献]

- 大崎正瑠（2000）「日本人の『国際化』感覚」三一書房
- 学研辞典編集部（2003）「用例で分かるカタカナ新語辞典」学習研究社
- 環境省 ホームページ <http://www.env.go.jp>
- 熊抱ゆかり（2003）「カタカナの氾濫—現在の動向と今後の対応—」日本比較文化研究 No.61 21-31
- 熊抱ゆかり（2005）「歯止めが効かないカタカナ語の氾濫—学生の視点を交えて—」日本比較文化研究 No.68 69-78
- 国立国語研究所 ホームページ <http://www.kokken.go.jp>
- 小林美恵子他（2002）「日本人にも外国人にも心地よい日本語—共生社会の日本語」明石書店
- 野角幸子（2003）「日本社会にあふれるカタカナ語」新風舎
- 読売新聞 平成17年2月8日発行朝刊
- 読売新聞新日本語企画班（2003）「新日本語の現場」中央公論新社

**[追記]**

本論文は2005年6月11日に開催された、第27回日本比較文化学会全国大会（於：福岡女学院大学）のシンポジウム「多文化交流から多文化共生へ」に於いて、筆者がパネリストとして口頭発表したものを加筆修正したものである。